The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	百濟康義教授の訃
Author(s)	森安, 孝夫; ツィーメ, P.; 吉田, 豊
Citation	内陸アジア言語の研究. 2004, 19, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/19907
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

百濟康義教授の訃

中央アジア仏教文献学の分野で数々の業績を挙げてこられ，世界的に著名であった浄土真宗本願寺派四恩山善照寺第十九世住職，百濟康義・龍谷大学文学部教授は，平成十六(2004)年五月十二日払暁，山口県豊浦郡豊北町阿川の善照寺にて，五十八年の生涯を閉じられた．同十五日にはしめやかな密葬が，そして同二十六日には盛大な門徒葬がそれぞれ善照寺にて営まれた．百濟教授は本誌の責任編集者である我々三名とはきわめて深い学問的な絆で結ばれていたため，そのあまりにも早い御逝去は痛恨の極みである．とはいえ，数年前に喉頭癌を宣告され，三度の大手術を経た文字通りの闘病生活からようやく解放されたのであるから，今はむしろ浄土に趣かれたことに安堵の感を覚える次第である．

百濟教授は昭和二十(1945)年五月三十一日，兵庫県加古郡播磨町の正願寺住職・井上信義氏の次男としてお生まれになり，昭和三十九(1964)年，龍谷大学文学部仏教学科に入学，その後は順調に同大学院修士課程・博士課程へと進まれた．その間の昭和四十八(1973)年，同窓の百濟小雪さんと御縁があって，養子縁組の形で善照寺に入られた．昭和五十八(1983)年には龍谷大学・専任講師となり，昭和六十 (1985) 年に助教授，平成三 (1991) 年に教授に昇進された．

目下，我々が蓮池利隆氏らの協力を得て作成中の業績目録には約 80 点の論著が採録されるが，その劈頭を飾るのはトカラ語仏典の研究 4 点である．これは百濟氏の恩師が井ノ口泰淳教授であったことの影響である．次いで本格的にウイグル語仏典の研究が始まり，これが彼の仕事の真髄となった．その業績は著書も含めて優に 30 点を越えている．しかし，これに止まらないところが彼の持ち味であり，ズンダーマン W. Sundermann 博士との共同によるソグド語仏典の研究が 5 点も出版されているのをはじめ，サンスクリット語やチベット語の文献に関わる業績まで散見される．もちろん，中央アジア出土の漢文仏典の同定作業については格段の仕事をされ，前世紀初頭に欧州や日本から中央アジアに

入った各国探検隊が各地に将来した古文書を探し求め，カタログとしてまとめられた成果には，自称「写本ハンター」としての面目躍如たるものがある．しかしながら，ベルリン所蔵漢文仏典をはじめ，同定作業の成果の半ばが生前に日の目を見なかったのは返す返すも残念であった．これらは既に出版予告も出ていることであり，後進の蓮池氏らによってすみやかに完成されるよう願っている．

西本願寺の若き門主として明治時代の日本に巨大な足跡を残した文化的英雄・大谷光瑞が組織した大谷探検隊は世に広く知られ，その衣鉢は龍谷大学に受け継がれている．大谷探検隊によって将来された中央アジア出土文書が，ベルリン及びサンクトペテルブルクのコレクションと並んで，仏教文化史上の貴重な遺産であることは贅言を要さないが，龍谷大学大宮図書館に所蔵されるいわゆる大谷文書(正式には西域文化資料)の公開，外部の研究者との共同研究に大きな道をつけられたのも百濟氏の功績と称してよかろう．我々三人はとりわけ彼の恩恵を蒙っている．1989年に行なわれた龍谷大学三五〇周年記念学術行事「人間・科学・宗教」の一環として開催されたシンポジウム「仏教東漸」においては裏方として活躍されたが，なんといっても記憶に新しいのは，大谷探検隊百周年記念学術企画「仏の来た道」の一環として氏が企画され，昨2003年初秋，京都で開催された国際学会「シルクロードの文物と現代科学」の成功である．その会期中の五日間に亘り，百濟氏が主宰者として先頭に立って全てを差配された姿は，今でも我々の目に焼き付いている．あれから僅か八ヶ月後に永遠の別離があろうとは，いったい誰が想像し得たであろう．

本願寺にもっともゆかりの深い阿弥陀経と同じ名でAbitaki（アビタキ；阿弥陀経のウイグル字音）と呼ばれる白蓮社関連のウイグル語仏典については，ツィーメが長らく百濟氏と共同研究を行なってきた．そして氏は死の直前までその解明に心血を注いでおられた．このテキストは真に長大なものであるが，昨年秋の学会に中国の耿世民教授が参加された折，庄垣内正弘・京都大学教授も含めた四人で，より包括的な研究を行なう事が合意された．百濟氏にとってはもっとも心残りであったに違いないこの大事業は，ツィーメが責任をもって

進めていく所存である．また，本年九月三日には，ベルリンでささやかながら百濟教授を偲ぶ会を開催する予定であり，そこでもツィーメが業績紹介と追悼の詞を述べることになっている．

上記のカタログやアビタキなどの未発表の仕事を含め，中央アジア文献学に関する彼の有形・無形の貢献の全貌が明らかになるにはまだまだ時間を要し，斯学と百濟氏との御縁が切れることはない．我々は今後も折に触れて彼の業績に接するわけであり，その度にあの温厚な笑顔を思い出すことであろう．

2004年6月18日　合掌

森 安 孝 夫，P. ツィーメ，吉 田　豊